

あとがきに代えて

池田満寿夫とのエピソード「人生はエロスだ！」

佐谷和彦

今回の第23回オマージュ瀧口修造展は、池田満寿夫(1934-97)を取り上げることとした。そのタイトルは「池田満寿夫のデビューとその後」である。

今回は会場をお借りする寺田小太郎さんとの共催である。寺田さんのご好意で、場所は初台の東京オペラシティ54階「トップルーム寺田」である。会期は11月1日(金)から21日(木)まで。日祭日休み。営業時間は午後1時から7時まで。

この展覧会について、まず「池田満寿夫の〈デビュー〉と〈その後〉」についてコメントしておきたい。この〈デビュー〉とは何を意味するか？ その前提として瀧口修造が企画の一切を担当したタケミヤ画廊の展覧会についての理解が必要である。

瀧口修造の自筆年譜(『現代詩手帖』1974年10月臨時増刊号 p.344)に次の記述がある。

1951(昭26)48歳……6月1日から神田駿河台の画材店竹見屋に「タケミヤ画廊」開設、若い新人に無償で会場を提供することになり、人選交渉一切を依頼されたので、私も無償を条件として引受ける。昭和32年2月まで6年8ヶ月間に201回の個展(稀れにグループ展を含む)を催し、多くの未知の作家に出会う。(その記録は「美術手帖」1964・8月号、藤松博「タケミヤ画廊と瀧口修造」に詳しい。)この年……「実験工房」出発する(私の命名)。……

このタケミヤ画廊展の1957年「第3回銅版画展」に、池田満寿夫は「洞くつの歌」(1956年作)、「作品」(1957年作)の2点を出品した。因みにこの銅版画展の出品作家は次のようなメンバーである。わが国の代表的な銅版画作家が並んでいるので、まさに初舞台としては申し分ないのである。

浜口陽三、浜田知明、磯辺行久、稻田三郎、加納光於、加藤正、駒井哲郎、南桂子、野中ユリ、関野準一郎、鶴岡康弘、上野省策、深沢幸雄、そして池田満寿夫である。計14名。

〈その後〉とは何を意味するか？ それは1960年代の池田満寿夫の爆発的な活動の時期を示している。1960年の第2回東京国際版画ビエンナーレ展で文部大臣賞(ヴィル・グローマンの推挙)、62年同展で東京都知事賞、64年同展で国立近代美術館賞を受賞。65年にはニューヨーク近代美術館で個展(ウィリアム・S・リーバーマンの企画)、66年にヴェネツィア・ビエンナーレで版画部門国際大賞を受賞し、内外ともに池田満寿夫の地位を確立した。その背景には瀧口修造の池田満寿夫に対する共感と協力が見える。

今回の展覧会は池田満寿夫の〈デビュー〉と〈その後〉、1956年から1970年までの優れた作品41点（出品リスト参照）を展示し、ご覧いただくものである。

私は、池田満寿夫のしごとは1950年代にスタートし、60年代に完成したと考えている。この時期が、池田満寿夫の才能が開花した最高の時期である。それ以後は彼の多才でセンスのいい才能が多方面で示されたと見ている。すなわち小説『エーゲ海に捧ぐ』で芥川賞受賞（1977年）。映画では「エーゲ海に捧ぐ」（1979年）、「窓からローマが見える」（1981年）の監督として制作。1983年には作陶に挑戦、という多彩な活動でマスコミの寵児になった、と私には見える。それはそれで見事なものである。

しかしながら、芸術の原点に立ち戻って池田満寿夫のしごとを通観すると、1950年代60年代の作品が、内部の心の輝きのピークに達していると私は思う。

ここで、カタログのテキストをご寄稿いただいた3人の方々にお礼申し上げます。

宮澤壯佳さんの「“詩人の贈物”から封印された疑問へ——池田満寿夫にとって瀧口修造の存在は何だったのか——」の文章は、今回の展覧会のテーマにピタリと的を絞ったテキストで、ご寄稿いただいたことに深謝しております。さすが池田満寿夫美術館の館長ですね。長年にわたり関係資料を涉獵し、池田満寿夫の全体像を綿密に調べておられることが見えて驚いた。瀧口修造と池田満寿夫の双方にかかる文献、写真等をご提供いただいたことは、嬉しくありがたいことです。

池田龍雄さんからは「池田満寿夫の笑顔」のエッセーをいただいたが、1948年以来、わが国の現代美術にかかわってこられた作家だけに、池田満寿夫の1955年の笑顔から、亡くなる10日前（1997年）の笑顔まで見届け、陽性のエロティシズムに感心するともに、作家の苦悩、苦渋が見えないのが不満だと記されている。

阿部博好さんには今回の展示作品をお貸しいただき、深謝申し上げる。とともにエッセーをいただいた。1962年以降、池田満寿夫の作品をコレクションし、池田満寿夫を熱愛した人物である。阿部さんの詩集に池田さんがその表紙を描く間柄で、この2人の素直な関係が見えてきて楽しい。池田満寿夫的一面を示している。

さて、私は池田満寿夫とのエピソードについて2、3記しておきたい。

恐らく1967、8年頃であったと思うが、当時、私は池田満寿夫の作品に興味を持っていた。南画廊を訪ねた際、近くの日本橋画廊を訪ね、池田満寿夫の作品を見た。その頃、ただ今は番町画廊主の青木さんが私の相手をしてくださって、2、3点作品を買った憶えがある。その中で「五月」（1966年）という作品には今も強い印象を持っている。たしか3万円で買ったと記憶している。もっともこれらの作品は、ただ今は手許はない。

1973年に私は南画廊の志水楠男さんから誘われ、銀行を退職し南画廊に勤めることになった。その前後から瀧口修造先生とお会いし話す機会が次第に増え、先生のお宅に時々伺い、お話を聞くのが楽しみという状態となつた。

某日、先生の書斎の椅子のそばに先生宛の池田満寿夫からの封筒があつた。先生に見せていただいたが、そこには池田満寿夫のエッチング5点が納められていた。

この作品は、宮澤さんの池田満寿夫年譜には、瑛九の序文入りで1956年に自費出版された『池田満寿夫エッセイ集』(限定30部 5枚入価格1,000円)であると記されている。その封筒の宛名が「瀧口修三様」とあったのには、思わずオヤオヤと微笑したのを憶えている。

面白いと思うのは、その当時に20年前の池田満寿夫の作品集が瀧口先生の手許に置かれていた事実である。どうしてそこにあったのか？先生に尋ねなかつたので分からない。もともと瀧口先生は作家から贈られてきた作品は大事に保存される方であったが……。この事実から、先生は池田満寿夫という作家にシンパシーを感じておられたことは間違いない、そのことが読み取れるのである。

ちょうどその頃であったか？私は不忍画廊の荒井一章さんを訪ね、そこで池田満寿夫さんに会い、2、3人の人達と一緒に近くの「宮城」なる居酒屋のスタンドに座りお酒を呑んだことがある。どういうわけか次第に空気が盛り上がり、ドンチャン騒ぎとなり、満寿夫さんの隣に座った私は、2人で交互に歌(軍歌、昔の流行歌、そして寮歌など)を歌う仕儀となった。ここの女主人の吉川安恵さんは池田満寿夫の大ファンで、歌には心得のある本格派に近い美声の持ち主だけに、居酒屋貸切りとなりますますボルテイジが上がつたのである。ここまでいくと本音が出るのは自然である。満寿夫さんは拳を挙げて「佐谷さん！人生はエロスだ！」と息巻く始末と相成った。その時、私がどう答えたかは憶えていない。

この言葉は別言すれば「人生は女だ」ということになる。至言である。人間は男も女も程度の差はある愛憎こもごもの世界に住んでいるのだ。

その後、渋谷に繰り出し大きな仁丹の広告塔を見たことまでは憶えているが、その後は憶えていない。もう20年以上も前のこと、私が50歳頃の話である。私は池田満寿夫という温かい人間に会つたことを、今も懐かしく思っている。

最後に、池田満寿夫夫人の佐藤陽子さんに今回の池田満寿夫展にご協力いただいたことに感謝申し上げます。その他、名は記さないが多くの方々のご協力をいたしましたことに感謝いたします。ありがとうございます。

2002年9月23日